九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドにおける「悪魔」 : ウィリアム・ブレイク解釈を踏まえて

西村, 晶絵
電気通信大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/2203077

出版情報 : Stella. 37, pp.267-280, 2018-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

ジッドにおける「悪魔」

――ウィリアム・ブレイク解釈を踏まえて――

西　村　晶　絵

はじめに

1921年に「アンドレ・ジッド氏の影響力」を著した教条主義的カトリックの批評家アンリ・マシスは，ジッド作品においては，善と悪の問題，罪の概念が強迫観念となっていると論じた[1)]。さらに，ジッドが異常なもの（l'anormal）や歪んだもの（le pervers）を志向しており，真実を否定し退けることを基礎としてその思索が成り立っているとした上で，こうした立場は神ではなく，サタンの勝利を望んでいるものと分析する[2)]。そして彼のごとき人物は「悪魔的（デモニアック）」であると糾弾したのだった[3)]。たしかにカトリックの人々から見れば，ジッドはカトリック的な「真実」を否定し，同性愛や病といった「異常なもの」や「歪んだもの」に関心を示したという点で，反キリスト教的＝悪魔的なものではあったろう。

こうした非難を受ける一方，ジッド自身も1914年頃から頻繁に「悪魔」という用語を使い，そこに価値を認めるような発言を繰り返すことになる[4)]。だが1910年代初頭までは，「悪魔」と関係する言葉はまだほとんど用いられておらず，その存在についての子細な議論や明確な概念も示されてはいない。ジッドにおいて「悪魔」は，1914年頃から生じた比較的新しい主題なのである。そのきっかけとしては，1914年9月24日に友人の画家ジャック・ラヴェラと交わした宗教とモラルをめぐる議論があったとされる[5)]。その後，本格的に「悪魔」についての関心が示されるようになるのは1916年頃から。この年に書かれたと思しき日記を皮切りに，その後はエッセイやドストエフスキーについての講演など，様々な場面で論じられるが，とりわけイギリス人芸術家ウィリアム・ブレイクの名前やその著作への言及とともに思索が展開されてゆく。ジッドはそのブレイク論を深化させるなかで自らの「悪魔」をめぐる考察を具体化していっ

たのである。

本稿では，こうした「悪魔」への関心の誕生を確認したうえで，その後ブレイク解釈を通じて示されるジッドの「悪魔」観の特質を検討する。そして「悪魔」という宗教的な「悪」をめぐる彼の立場を明らかにしたい。

「悪魔」との出会い

1910 年代に入った頃までのジッドにおいては，「悪魔」についての子細な検討が見られない[6]。「悪魔」についての具体的な観念を持ったのは 1914 年以降のことである。1916 年に書かれた日記には，その契機として 1914 年にラヴェラと交わした宗教に関する議論があったことが示されている――

> 私はその時まで，神を信じるためには悪魔（le Diable）を信じることが絶対に必要だということに，よく気がついていなかった。本当のことを言うと，悪魔はまだ一度も私の想像力の下に現れていなかったのだ。私の悪魔についての概念は完全にネガティブなものだった。私は姿を見ることなく，それに有罪判決を下していた。私は神の周囲を神だけに制限していた。それに私は神を至る所に延長していたので，もう一方の存在をどこにも出現させなかったのだった。とにかく，私は悪魔の存在を形而上学的な存在としてしか認めていなかったし，ジャック・ラヴェラが突然悪魔を示したあの秋の夜も，私は当初，微笑んだにすぎなかった。[7]

ジッドはここで，1910 年代に入るまで，「悪魔」が自分にとって大きな位置を占めておらず，あくまでも概念的なものに留まっていたことを明らかにしている。だが，1890 年代からキリスト教の問題を問い続けていた作家であるにもかかわらず，この時まで「悪魔」についての思索を深めたことがなかったというこの告白は，いささか奇妙にも思われる。なぜ彼はこの時まで「悪魔」を意識せずにいたのだろうか。

「悪魔」についてのジッドの関心の希薄さは，実のところ，プロテスタントたちの間ではさほど珍しいことではないとされる。『悪の系譜』を著した歴史学者・宗教学者の J・B・ラッセルによれば，カトリック教会や東方教会，保守的なプロテスタント教会が 19 世紀後半においても依然として悪魔の人的存在の実在性を擁護し続けていたのに対し，自由主義のプロテスタント神学は悪魔を否定するか，少なくとも無視する傾向があった[8]。そこでは悪魔の概念が認められる場合でも，あくまでも人間の悪の例えにすぎず，サタンは人間の罪のな

かに実現されるものとしてのみ存在するというのが定説となっていた[9]。ジッド自身も「プロテスタンティスムは，天使も悪魔も考慮にいれない傾向がある。『あなたは悪魔を信じるか』という問いは，〔プロテスタントたちから〕一種の驚きを持って迎えられる」[10] と述べており，J・B・ラッセルの指摘するようなプロテスタントの宗教的特徴を備えていたと見ることができる。ジッドの受けたカルヴァン主義に根差した宗教教育においても，また 1890 年代後半以降に展開される彼の独自のクリスティアニスムにおいても，「悪魔」は見落とされていたのである。

こうしたジッドの「悪魔」への意識の欠如は，「悪」の捉え方とも大いに関係していよう。まだ「悪魔」に積極的な意味を見出していなかった頃，神の領域が「善」ならば，「悪」（le mal）は次のようなものと認識されていた――

> 私はまだ悪がポジティブで活動的で，大胆なものだと理解していなかった。その時私は，陰が光の欠如であるように，悪とは善の欠如だと思っていた。そして，とかく私は光にすべての活動の世界を結び付けていたのだ。[11]

ジッドにとっては，「善」こそが完全なものであり，それの欠けたところに存在するものが「悪」であった。つまり，「善」「悪」という 2 つのものが並列に並べられているのではなく，「善」に対して「悪」は二次的な存在と捉えられていたのである。ゆえに「悪」の側に含まれる「悪魔」は，そのものが重要な存在，思索の対象と捉えられることはなかったといえる。

ところがラヴェラとの会話を通じ，ジッドは「悪魔」について次のような考えを抱いたという――

> それ〔＝悪魔〕はすでに私のなかに住んでいたのに，いまだそれを識別してはいなかった。悪魔は私を征服していたのに，私は自分が勝利したと思っていた，そう，私自身に勝利したと。なぜなら，私はそれに身を任せていたからだ。そして，それが私を説得してしまっていたのに，私は征服されたとは思っていなかったのだから。[12]

ここでジッドは，積極的に活動して人々をそそのかし，征服してしまう能動的存在として悪魔を認識するに至ったことを明らかにしている。今や神＝善の欠けたものが「悪」であるという消極的な捉え方ではなく，善とは別に存在し，善を凌駕するほどのエネルギーを持ち，人々に「悪」を為させるという積極的

な存在として「悪魔」が認識されたのである。

しかしながらジッドにおける「悪魔」は，カトリック教会的な人的存在の実在性を持つものとしてではなく，あくまでも心の内に表れるものであったと考えられる。なぜならば，「それは私のなかにすでに住んでいた」という一文が示すように，「悪魔」は人間の精神のなかに現れるものとして捉えられているからである。心の内に人間が創り出したものであるという思索は，以下のジッドの想像上の「悪魔」の言葉にも表れている――

> 「私に存在を与えてくれたことに対して，まずは感謝する！ そう，お前には私を創出したのがお前の好意だということがよくわかっているはずだ。お前には，私が存在していなかったということがよくわかっているはずなのだ。だがおそらく，神を信じるために，私に立ち向かうのにお前を助けとなるだろう一人の神を信じるために，お前は私を梃にして弾みをつける必要があったのだろう。
> 〔…〕
> 愉快なのは，〔…〕これからは，お前が他方〔＝悪魔〕抜きにもう一方〔＝神〕を信じることができなくなるということだ」[13)]

ここから理解されるのは，ジッドにとって「悪魔」は，人間の創造物に外ならず，人間の精神を超えて存在するものではないということである。だが，ひとたびそれを意識し始めた途端，もはやそれとの関係を通してしか神を捉えられなくなってしまうほど「悪魔」の作用は強い。だとすれば「悪魔」に主体性を認め，神への信仰をも「悪魔」を出発点とするジッドの宗教観は，後にマシスに批判されるように，悪魔中心主義的なものへと転じてしまったのだろうか。

この問いを検討するうえでは，ジッドによるブレイク解釈が重要である。続いてブレイク的「悪魔」にかんする彼の思索を追い，「悪魔」と神とをめぐるロジックを明らかにしていくことにしよう。

「悪魔」をめぐる価値転換

ジッドの「悪魔」への関心は，その実，宗教についての見方だけでなく文学観にとっても極めて重要なテーマとして表出する。というのも，「悪魔」という観点を得たことは，例えばニーチェやドストエフスキー，ブラウニングといった他の作家たちへの深い理解を促す契機ともなったからである。なかでも，ジッドが特に「悪魔」という観点からその作品や思索を論じた作家はブレイクであっ

た。この作家とその作品についての解釈を示すなかで，ジッドは自身の「悪魔」についての思索を明かす。本節では，ブレイクについて記されたテクストを分析することで，ジッドにおける「悪魔」がいかなるものとして捉えられているのかを検討し，それとも連動する宗教的立場や文学観の特徴を浮かび上がらせたい。

まずはジッドとブレイクの関わりについて簡単に触れておこう。ブレイクはジッドにとって重要な位置を占める作家ではあったが，ふたりの関係についてはこれまでほとんど顧みられることがなかった。しかしながらジッドにおける「悪魔」の問題は，この詩人についての思索の検討なしには理解しえない。彼が「悪魔」という言葉を用いる際には，頻繁にブレイクの名や『天国と地獄の結婚』の一節を引いているからである。ブレイクを主題としたエッセイや評論はないものの，日記や1922年2月18日から3月25日にかけて行われたヴィユー・コロンビエ座でのドストエフスキーについての連続講演などでは，この作家への深い考察が残されている。それらの分析を通じて，ジッドがブレイクをいかに解釈し，そのなかで「悪魔」がいかなるものとして論じられているのかを検討していこう。

ジッドがブレイクの名を最初に日記に留めたのは，1914年8月22日。そこではイェイツによるブレイク集の序文を読んだことが記されており[14]，続く25日には，驚きをもって読書を続けていることが綴られる。こうしてブレイクを知ったのは，先述のラヴェラとの会話によって「悪魔」への関心が惹起されたのと同年である。したがって同年はジッドのなかに「悪魔」についての関心が真に芽生えた時期であったと考えられる。その後，1922年1月にシャルル・デュボスを通して『天国と地獄の結婚』を手に入れると，それを通読し大きな感銘を受けたのだった。日記の記述――

> ブレイクとの出会いは，私にとって最も重要である。〔…〕まだ直接光を感知していない星の存在を推測する天文学者のように，私はブレイクを予感しつつも，ニーチェ，ブラウニング，ドストエフスキーと共に星座をなすとは，まだ気づいていなかった。おそらくこのグループのなかで最も輝いており，間違いなく最も奇妙で，最も奥まったその星に。[15]

ブレイクは，ジッドにとってニーチェ，ブラウニング，ドストエフスキーと

並ぶ巨星として，しかもひときわ異彩を放つ存在として位置づけられることとなった。『天国と地獄の結婚』に深い感銘を受けたジッドは，1922 年 8 月 1 日発刊の『新フランス評論』誌に，自ら手掛けたこの詩の仏語訳を掲載する。その序文で彼はこの作品を「画家であり詩人である偉大なイギリス人神秘家の，最も意味深く，最も錯綜していない『預言的な書物』」[16] と紹介した。さらに同序文によれば「イギリスにおいては長い間ほとんど完全に無視され，今日においてなお，この著作を知り，これを愛好するものはかなり珍しい」[17]。ブレイクは，今日でこそ世界的に名の知られた作家であるが，当時はイギリス国内でさえ顧みられることの少ない存在だったようである。そのような状況のなかで，いち早くこの作家の価値を認めフランスに紹介したジッドの功績は高く評価されてしかるべきであろう [18]。

1790 年頃に作成された『天国と地獄の結婚』は，画家でもあったブレイク自身による数々の挿絵と共に織りなされる詩画集であり，神やサタン，天使や悪魔，善と悪についての従来のキリスト教観を越えて，それらについての新しい視点を提示しようとする壮大な物語である。形式と内容については，ブレイク研究者・佐藤光の評言が簡潔に示しているので，以下に引用しておこう――

> 短詩「梗概」（The Argument），匿名の語り手が神や善悪に関して議論を展開する無題の散文，「悪魔の声」（The Voice of the Devil）と題された論説，語り手「私」が語る「記憶すべき幻想」（A Memorable Fancy）という断片的な物語，ことわざのような短文の集積からなる「地獄の格言」（Proverbs of Hell）など，韻文と散文の入り混じった多様な表現形態が組み合わされており，ブレイクの作品のなかでも特に異彩を放つ。[19]

ここで紹介されているように，詩といっても全体の形式は一定しておらず，断片的ないくつかのパーツが組み合わされたような構造になっている。内容はタイトルからも連想されるように，キリスト教的な世界観のパロディである。しかしブレイクによって風刺されるのは，制度としてのキリスト教，とりわけスウェーデンボルグの新エルサレム教会であり [20]，イエスの存在そのものが否定されているわけではない。ブレイク本人は生涯を通じて教会と呼ばれるような組織に身を置くことはなく，独自のキリスト教観を有していたとされる [21]。

ジッドによる『天国と地獄の結婚』の仏語訳をブレイクによる原文に照らし

合わせると[22]，おおよそ忠実に訳が充てられているように見受けられ，訳者の側の恣意的な解釈を認めることは難しい[23]。したがって，ここからジッドによるブレイク解釈の特質を浮き彫りとすることは容易ではない。ジッドがこの作家やその作品についての見解を明かすのはむしろ，日記やドストエフスキーをめぐる思索においてである。なかでも特に重要な言及は，1922 年の 2 月 18 日から 3 月 25 日にかけて行われたドストエフスキーについての連続講演のなかに見られる。ジッドはドストエフスキー作品を説明する上で，『天国と地獄の結婚』に記された言葉を繰り返し引き合いに出しているからである。

連続講演の内容から浮かび上がるのは，ジッドがブレイクにおいて特に評価していたのはエネルギーを称賛する態度であったということだ――

> 〔…〕「エネルギーは唯一の生である。エネルギーはとこしえの歓びである」とブレイクは言いました。
>
> さらに次の〈格言〉にも耳を傾けてみてください。「過剰の道は知性の宮殿へと導く」あるいは「もしも愚かな者が自らの愚かさを辛抱強く続けるならば，彼は賢くなるだろう」，そして他には「過剰を最初に知った者だけが十分を知ることができる」。このエネルギーの賞賛はブレイクにおいて，最も様々な形をとっています。「ライオンの吠え声，オオカミの遠吠え，怒った海の隆起，破壊する剣は人間の目には余りに並外れた永遠性のかけらである」。
>
> さらによく読んでみましょう。「水溜は含み，泉はあふれる」，「怒ったトラは知性を持った馬よりも賢い」，そしてついに『天国と地獄の結婚』が始まるこの思想，ドストエフスキーが知らずに我がものとしたこの思想，すなわち「対立なくして進歩もない。引力と反発力，理性とエネルギー，愛と憎しみは人間の存在にとって等しく必要である」。さらに続けて，「地上には，常に敵同士である二つの矛盾した請願がいつもあったし，これからもあり続けるだろう。それらを和解させようとすること，それは存在を破壊しようとすることである」[24]

ここでジッドは『天国と地獄の結婚』のなかから，様々な文言を列挙している。断片的な引用文では趣旨がわかりにくいが，言葉の意味を順に見てみると，要点は極めてシンプルである。まず「エネルギーは唯一の生である。エネルギーはとこしえの歓びである」という最初の一節は，「悪魔の声」のなかに記されている。これは生におけるエネルギー（＝肉体的・精神的活力）の重要性と，それこそが不変の歓びであることを語った文章である。こうした物の見方は，エネルギーの上に理性を置き，エネルギーをコントロールすることによって来世

での至福に至ることを約束する既存のキリスト教教会の教えとは相反するものであることが指摘できよう。この一節に続く「過剰の道は知性の宮殿へと導く」から「怒ったトラは，知性を持った馬よりも賢い」までの警句は，「地獄の格言」のなかに記されている。これらも理性によって押しとどめられるものに対して，その限界を突破する過剰なエネルギーの存在とその重要性を示した文章であると考えられる。そして最後の二文（「対立なくして進歩もない〜」と「地上には，常に敵同士である二つの矛盾した請願がいつもあったし〜」）においては，背反する二つの物事こそが，人間の生にとって，あるいは人類の進歩にとって必要不可欠なものであるという見解が示されている。つまりジッドは，対立し合うもののなかに価値を認め，そこに生のエネルギーを見ようとするブレイクの態度を高く評価しているのである。

このように反発し合う要素によって生み出されるエネルギーへの着目をジッドが評価するのは，そこに固定化された価値の判断基準や静的な状態を打開する力を見ていたからであろう。キリスト教的な二項対立に基づく物の見方においては，一般に理性や愛といったものが善に属するとされ，エネルギーや憎しみ等は悪の側のものとして切り捨てるか消し去ることが求められる。しかしブレイクは，こうした善や悪，正や偽といった二分法を，前者を際立たせるために教会によって定められたものであるとして一蹴する。そして彼がパロディ化しようとしたのは，一面的な物の見方を強要し，それを支えとして自らの正しさを前面に押し出す教会や聖職者なのであった。ブレイクの教会制度批判は，『天国と地獄の結婚』の最後の悪魔の言葉，すなわち，イエスが行動したのは律法に基づいてではなく，むしろそれを破ってでも内的衝動に従ってであった，ということを論拠としてその正当性が主張される[25)]。このような立場は，律法によって人々を縛る教会組織に対して批判を展開し続けたジッドにとって，まさに自らのクリスティアニスムのそれと一致するものと映ったに違いない。

ブレイクとジッド両作家の立場には，忌避されてきたものにも，人間にとっての価値がありうるという「悪」をめぐる積極的な態度が認められるが，こうした見解は彼らの芸術論へと連なってゆく。「ミルトンが神や天使を描く時，障害のなかで執筆し，悪魔や地獄を描く時，自由のなかで描いたのは，彼が本当の詩人だったから，つまりそうとは知らず悪魔側の詩人だったからだ」[26)]と『天国と地獄の結婚』には記されている。この一節を引きつつ，ジッドも「美しい

感情によって悪い文学が作られる。悪魔（démon）の協働のない本物の芸術作品はありえない」[27] と論じ，芸術における「悪魔」の重要性を指摘する。両作家の言葉の意味するところのものは，ジッドがアンジェリコとアッシジのフランチェスコを例に論じた以下の一節によって理解されよう――

> 〔アンジェリコ〕があれほどの偉大な芸術家になることができたのは〔…〕，彼の完全なる純粋さにもかかわらず，彼の芸術が現在そうであるところのものになるために，悪魔の協力を認めたからに違いないのです。悪魔の協力なくして芸術はありえません。聖人というのは，アンジェリコのことではありません。それはアッシジのフランチェスコのことです。聖人たちのなかに芸術家は存在しません。また芸術家のなかに聖人も存在しません。[28]

聖人とは，迷いや苦悩を超越し，高い徳や深い信仰を持った理想的な人物のことである。しかしジッドの見解によれば，芸術を為すのはそのような人々ではない。芸術とはむしろ，聖人とは正反対に，様々な苦しみや悩み，憎しみといった否定的な感情を抱えた人間によって生み出されるものに外ならないからである。その意味でブレイクとジッドがここで問題にする「悪魔」とは，実体を持ち外部から人間に作用を及ぼす存在ではなく，人間の内部に存在する負の側面であると言えよう。そして芸術家は，自身の内部に抱えた悪を，作品を通じて表出させることによって，真に価値のある作品を生み出すのであり，その意味で「悪魔」と無関係でいることは不可能なのである。

だが重要なのは，両作家とも人間や芸術にとっての「悪」の重要性を認めつつも，「善」を排して悪の価値を高めようとしていたわけではない点である。作品のタイトルからもうかがえるように，ブレイクは善と悪，神と悪魔といった，相反するものの立場を逆転させるのではなく，あくまでもその「結婚」，すなわち，切り離されて考えられてきたそれらを同じレベルに置き直し，その関係性の新たな可能性を提示しようとしたのだった。というのも，ブレイクがこの詩を通じて示し，ジッドが評価したのは，二項対立的な物事が成立するためには，相反するものによって支えられる必要があること，つまり他がなければ自もなく，悪がなければ善もないということ，そしてこの相反する 2 つの力が合わさった時に人間にとっての大きな価値が生まれるということだったからである。

ブレイクについての理解から浮かび上がるのは，ジッドの「悪魔」の捉え方

は，神に敵対する悪魔主義的なものではないということである。彼は「悪魔」に能動性を認めたうえで，それによってもたらされる「悪」が各人に存在することを肯定するが，それは自らのうちに対立する要素こそが，生のエネルギーを生み出すものと見ていたからであった。こうした「悪魔」をめぐるジッドの思索は，「悪魔」に抗うことのできない弱い自身をそのまま神に委ねることが真のキリスト者であるとの考えへと導かれる。彼はドストエフスキーについての講演において次のように述べている――

> ドストエフスキーほど次の福音書の教えを実践しえた芸術家はいません。「自分の生を救いたいと望む者はそれを失い，それを捧げようとするもの（自らの生を放棄しようとするもの）は，真にそれを生き生きしたものにするだろう」[29]

ドストエフスキーを例に「諦観 résignation」の態度こそが，福音書に記されたイエスの教えに適うものであることが示される。ジッドは弱い自分をありのまま認め，そうした生を受け入れて生きることにこそ，神へと至る道を見ようとしたのであった。

おわりに

以上に見てきたように，ブレイクのなかに自らの「悪魔」についての思索の類似性を認めたジッドは，前者への解釈を示すなかで，自身の「悪魔」論を展開したのだった。そこでは，「悪魔」やこれによってもたらされる「悪」が，各人や芸術家にとって重要な役割を果たすものと捉えられていた。だがジッドにとっての「悪魔」が個人の精神のうちに存在するものである以上，彼が「悪魔」というタームを通じて示したのは，己の精神との向き合い方についての思索であったとも言えるだろう。そして自己の不完全さも含めて神に従うことが真にイエスの教えに適う態度であると論じたが，これこそは，「悪魔」や「悪」を認めず，その排除に努めることで自らの生に執着するカトリックへの批判と見ることができる。

ジッドの「悪魔」についての思索の深化が示されるのは，1926 年刊の『贋金使い』においてであろう。同作を執筆中に記していた日記，すなわち『贋金使いの日記』のなかには，「作品全体を通じて人に知られずに徘徊するひとつの存在（悪魔）を描きたい」[30] との記述が見られるからである。実際にこの作品に

おいては，多くの登場人物たちが「悪魔」というタームと共に描き出されている。ブレイクについての思索を経て，ジッドが『贋金使い』において「悪魔」をいかに描いたかという点については今後の研究課題として，これをもって本稿はひとまず擱筆としたい。

註

1）Henri MASSIS, « L'influence de M. André Gide », *Jugement*, 2 vol., Paris : Plon, 1924. t. II, p. 7.

2）*Ibid.*, p. 16.

3）*Ibid.*, p. 21.

4）ジッドが「悪魔」についての関心や思索を表す際には，« le démon » « le Malin » « le Diable » « Satan » の 4 単語が用いられている。« le démon » についてジッドは，「この名前が，私の言わんとしているところのものの本当の名前であろうとなかろうとそんなことはどうでもよく，便宜上このように名付けることにする」と述べる（André GIDE, *Journal I 1887-1925*, [abrégé ensuite : *J1*], éd. Éric MARTY, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1996, p. 1013）。また « le Malin » については，「私はその姿をいずれの美徳も欠けているものとして描き出す」（*idem.*）と記している。一方，« le Diable » と « Satan » については，いかなる意味において用いられているのか判然としない。しかし，いずれの語に使用においても，そこに意味の明確な差異を認めることは困難であり，またジッド自身がどの程度使い分けに意識的であったのかという点も判然としない。むしろ，いずれの語も非人格でありながらも，能動的に人間に働きかけるような存在を表していることから，それぞれの語が示すものに大きな違いはないと思われる。こうした点から，本論文ではジッドがいずれの語を用いられている場合においても，「悪魔」という訳語を充てることにする。

5）その時の様子について，ジッドは翌日の日記に次のように綴っている――「延々とモラルと宗教について語り合う。彼〔＝ラヴェラ〕は悪魔を信じている。彼は神を信じる前から悪魔を信じていたとすら言っていた。私は彼に，悪魔を信じることを私に思い留まらせているのは，私がそれを嫌悪するということを確信できないからだと述べた。きっと私の小説においては，悪魔を信じる何者かが登場しうるだろう。これらの会話は我々ふたりにとってかなり大きな利益となりえたのではないだろうか」（*J1*, p. 869）。

6）1903 年に出版された戯曲『サウル』には悪魔（démons）が描かれるが，これは宗教的罪（怒り，色欲，恐怖，権力，虚栄）を比喩として表したものであり，ジッド独自の思索に基づいて表象されたものとは言いがたい。やはり本格的な思索が開始

されたのは 1914 年以降と見るのが妥当である。

7）*J1*, p. 1011. 強調はジッドによる。

8）J・B・ラッセル『悪魔の系譜』(大瀧啓裕訳)，青土社，1990 年，391 頁。

9）同上。

10）André Gide, « Dostoïevski », dans *Essais critiques*, éd. Pierre Masson, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1999, p. 627.

11）*J1*, p. 1012.

12）*Idem*.

13）*Ibid*., p. 1014.

14）*Poems of William Blake*, éd. W. B. Yeats, London : George Routledge, 1905, pp. 11-49. ジッドが読んだこのイェイツの序文においては，ブレイクの生い立ちや芸術家としての足取り，その思索，また作品が誕生する背景が簡潔に記されている。

15）*J1*, p. 1169.

16）William Blake, *Le Mariage du ciel et de l'enfer*, traduit par André Gide, *La NRF*, n° 107, août 1922, p. 9.

17）*Ibid*.

18）実際には，ジッドに先行して 1900 年に『天国と地獄の結婚』の仏語訳が出されている（voir William Blake, *Le Mariage du ciel et de l'enfer*. Traduction française avec introduction par Charles Grolleau, Paris : L. Chamuel, 1900）。しかしこの翻訳は出版部数が少なく，ジッドがブレイクの著作を簡単に手に入れられていなかったことなどからも，当時ブレイクやその作品の存在を知る者はかなり限られていたと思われる。

19）佐藤光『柳宗悦とウィリアム・ブレイク――環流する「肯定の思想」』，東京大学出版会，2015 年，224 頁。

20）スウェーデンボルグ（1688-1772）は，スウェーデンの科学者・哲学者・神学者。はじめ自然科学を研究したが，55 歳で神の啓示を受けて科学の限界を悟り，神霊者，神秘神学者となった。その思想においては，自我を捨てて神性の動くままに進退すべきであること，真の救済は信と行の融和一致にあること，神聖は智と愛との化現であること，愛は智よりも高く深いこと，神慮は全ての上に行き渡っていること，世の中には偶然がひとつもなく筆のひと運びにも深く神慮が籠っており，ここに神智と神愛との発言を認めうることなどが説かれている。また，三位一体を，唯一の神格における愛と知恵と活動性の統一と解することで，父と子と聖霊という三つの位格の統一としての伝統的教理を否定した。死後，1787 年に彼の教理に従う新エルサレム教会がロンドンで設立された。その影響はゲーテなどにも見られるとされる（鈴木大拙『スエデンボルグ』，「講談社文芸文庫」，2016 年，10 頁；『日本大百科全書』第 12 巻，小学館，1986 年，873-874 頁参照）。

21）佐藤前掲書，225-226 頁。

22）本研究が参照するのは，それぞれ次の版である―― Traduction d'André Gide :

William BLAKE, *Le mariage du ciel et de l'enfer*, *op. cit.*, pp. 129-147. ; William BLAKE, *The Marriage of Heaven and Hell*, in *The Complete Writings of William Blake, with variant readings*, Geoffrey KEYNES (ed.), London : Oxford University Press, 1975, pp. 148-160.

23）とはいえ，いくつか言葉の選択等にかんしては疑問が残る。例えばブレイクが « Improvement makes strait road ; but the crooked roads without Improvement are roads of Genius » と表しているところを，ジッドは « La culture trace des chemins droits ; mais les chemins tortueux sans profit sont ceux là même du génie » と訳出している。英語原文を日本語に訳すならば，「進歩はまっすぐな道を作る。しかし進歩のない曲がりくねった道は天才の道である」となるが，ジッドのフランス語訳を訳せば，「文化はまっすぐな道を作る。しかし，利益のない曲がった道はまさに天才の道である」という意味になる。« Improvement » に対して « amélioration » や « progrès » といった語ではなく，« culture » が充てられている明確な理由は分からないが，文化によって作られた「正道」に対して，曲がった道を進むのが天才であることを強調しようとした可能性はあろう。またジッドは，「地獄の格言」の最後から二文目に « Même lois pour le lion et pour le bœuf, c'est oppression » を挿入しているが，これは原文では詩全体の最後の一文 « One Low for the Lion & Ox is Oppression » に当たるたるものだろう。こうした語彙の選択や配置の転換がどの程度故意に行われたものであるのかは，ジッドが参照した版が不詳のため定かでないが，いずれもブレイクの詩全体のニュアンスが変わるほどの違いではないと思われる。

24）GIDE, « Dostoïevski », art. cité, p. 635.

25）「記憶すべき幻想」の最後には次のような文がある――「悪魔は答えて言った，『〔…〕イエスが十戒の律法をどう承認したかを聞くがよい。彼は安息日を無視し，こうして神の安息日を愚弄したのではなかったか？ 彼の名において傷ついた弟子を殉教の途に送ったのではなかったか？ 姦淫を犯した女のために法を曲げ，彼を生かしてくれた人々から仕事を盗み，ピラトの前での弁明を為さずに偽証を受け入れたのではなかったか？ 彼の弟子のため祈る時，また弟子たちに宿を貸すことを拒んだ人々に対して，彼らの履物の塵を払うよう命じた時，貪ったのではないか？ 次のことを言っておこう。すなわち，これらの十戒を破ることなしには，いかなる徳もありえないのだ。イエスは完全なる徳であった。彼は戒律によってではなく，衝動によって行為したのであった』」（BLAKE, *The Marriage of Heaven and Hell*, *op. cit.*, p. 158）。

26）GIDE, « Dostoïevski », art. cité, p. 638.

27）*Ibid.*, p. 637.

28）*Ibid.*, pp. 637-638.

29）GIDE, « Dostoïevski », art. cité, p. 577.

30）André GIDE, *Journal des Faux-Monnayeurs*, dans *Romans et récits. Œuvres lyriques*

et dramatiques, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, t. II, p. 531.